

養護教諭養成課程における学修の動機付け実践 —保健養護専攻・初年次教育プログラム「フレッシュマンセミナー」の報告—

女子栄養大学教授	大沼久美子
同 教授	遠藤 伸子
同 教授	野中 静
同 准教授	香川 雅春
同 専任講師	鞠子 佳香
同 専任講師	久保田美穂
同 専任講師	深田耕一郎

1. 初年次教育における学修の動機付け

女子栄養大学栄養学部保健栄養学科保健養護専攻は毎年、新入生を対象とした初年次教育プログラム「フレッシュマンセミナー」（以下、FS）を実施している。FSは学生が主体となって実行委員会を組織し、入学当初から9月初旬の開催日まで企画運営にあたる。当日には上級生や教職員も参加し、発表会・運動会・懇親会を通して、学年・立場をこえた交流を楽しむ。こうしたプロセス自体が新入生にとっては学びの経験となっている。

本専攻は、1980（昭和55）年の開設以来、養護教諭の養成課程として多くの卒業生を輩出してきた（香川栄養学園80周年記念事業編2013）。教育理念には「栄養学を礎として、子どもの健全な発育発達と健康の保持増進に関する専門的な知識技能を教授研究し、子どもを愛し尊重する豊かな人間性と高い倫理観を備え、常に時代の要請に応える実践的で専門性の高い保健・養護を担う教育者を養成する」ことを掲げている。理論と実践の統合に重点を置いたカリキュラムが特徴的であり、長期学校体験実習や病院実習、養護実習・教育実習等の実習科目とともに、先端の知識技能を教授する養護・看護・保健等の専門科目・教職科目が開講されている。こうした2年次以降に開講される実習・専門科目の学びを深めるために、基礎的な学習方法の習得を目的に設置された1年次の科目が「保健養護特論Ⅰ」である。FSは、この科目のなかに位置づけられており、いわば専門教育の階段をかけあがっていくための最初のステップとなる初年次教育プログラムである。

初年次教育とは、「専門教育以前に、大学教育、大学生活への円滑な移行を目的とし、学習技能、学習意欲、さらには大学生としての自覚の涵養まで含む、正課・正課外にわたる総合的教育プログラム」と定義される（杉谷2018:8-9）。日本の高等教育においては、大学の大衆化が進展した1960年代半ば以降、学生の多様化を背景として、「オリエンテーション」の域をこえた、新入生向けの演習科目として広がりを見せた。近年では、中央教育審議会が2014年の答申で、「学力の三要素」⁽¹⁾の育成・発展・向上を掲げ、高等学校教育と大学教育とをつなぐ初年次教育に「能動的学修を行うための方法の習得」を求めている。

初年次教育の一環に位置づけられるFSは、まさにこの「能動的学修」を行うための意識や意欲、つまりは動機付けを得る機会だと考えられる。教育理念に掲げる学生を育てるためには、いかにして学生の学修への動機を高めるか。本稿は、FSが学修の動機を高める教育実践として、どのような成果を生んでいるのかを検討することを目的とする。その検

討を踏まえ、今後の初年次教育のよりよい実践に活かすことのできるヒントを得たい。

2. 保健養護専攻フレッシュマンセミナーの目的

では、はじめに FS の目的を確認しよう。FS は、「学生が主体となって企画立案することにより、養護教諭を目指す学生の企画力・実行力・調整力の育成を図る」ことを大きな目標に掲げている。さらに各プログラムには次の目的を設定している。

- ①保健室訪問発表会を通じて、わかりやすく伝えあう力（プレゼンテーション能力）、他の学生の良さを観察する力の育成を図る。
- ②ミニ運動会を通じて、学生同士の団結力とコミュニケーション能力の育成を図ると共に、体を動かすことの喜びを味わう。
- ③同学年や先輩及び教職員との交流を図る中から人の輪を広げ、自己発見を促す。

以上の目的のために、FS の運営・実施にあたっては学生実行委員会を組織している。年度のはじめに新入生から実行委員を募り、学生実行委員長・副委員長を中心に、保健室訪問発表会係、ミニ運動会係、懇親交流会係、記録・しおり係を決める。FS の実施は例年 9 月初旬であり、本番まで学生が主体となって実施に向けた準備や当日の運営、事後の活動を行うのである。「すべては養護教諭になるため」というスローガンも聞かれるように、FS は養護教諭養成課程の初年次プログラムとして多くの教育的配慮が盛り込まれている。

次に FS のプログラムを紹介しよう。FS では表 1 に示す通り、終日様々な活動が盛り込まれている。保健室訪問発表会とは、学生が自分の出身校の保健室を訪問し、養護教諭にインタビューを行った成果を発表する機会である。事前に発表用の冊子を作成し、学生はプレゼンテーションの練習を行ってくる。当日は学生全員がグループに分かれて発表し相互に批評を行う。グループのなかから優秀者を選出し、優秀者は全員の前で発表する。

ミニ運動会では、長縄跳び、障害物競走、玉入れ、リレー、応援合戦などの競技を学生が企画・準備し、教職員も参加する。異学年教職員混合のチームを 4 つ編制し、チーム対抗で競技を行う。

懇親交流会では、1 年生、上級生、教職員が立食形式で互いに懇談することができる場をつくる。あらかじめ手作りの名刺を準備し、名刺交換のさいのマナーを学ぶ。歓談を通してクラスメイトや先輩、教職員との交流を深める機会である。

表 1 フレッシュマンセミナー・プログラム

時間	活動内容	場所
9:20	開会式	教室
9:50	第 1 部:保健室訪問発表会(グループワーク)	教室
12:10	昼食	カフェテリア
12:50	第 1 部:保健室訪問発表会(代表者の発表)	教室
13:50	準備	
14:20	第 2 部:ミニ運動会	アリーナ
16:20	片付け・準備	

16:40	第3部：懇親交流会・閉会式	文化表現ホール
-------	---------------	---------

3. 学生はフレッシュマンセミナーで何を経験しているのか

では、ここからは学生がFSで何を経験しているのかを確認していこう。例年、FS終了後すぐ、学生に対して自記式のアンケートを実施している。本稿では、このアンケート結果の過去7年間の単純集計と自由記述を参照する。そして、学生の意識・態度の動向を把握しよう。なお、FSでは平成24年度からこの形式のアンケートを実施しているため、それ以前のデータは参照できず、本稿では当該の7年間を対象とした。対象者はFSに参加した女子栄養大学栄養学部保健栄養学科保健養護専攻1年次の女子学生である。それぞれの年度の回答者数は表2に示す通りである。

3.1 アンケートの単純集計から

本アンケートの質問票には全部で17の設問がある。本稿ではそのなかから学生の意識・態度に関する設問8つをピックアップした(表3)⁽²⁾。そして、この8つについて、過去7年(平成24年～30年)の集計結果を図1～図8のようにグラフ化した。

表2 アンケートの回答者数

年度	回答者数
平成24(2012)年度	60名
平成25(2013)年度	65名
平成26(2014)年度	63名
平成27(2015)年度	62名
平成28(2016)年度	65名
平成29(2017)年度	66名
平成30(2018)年度	61名

表3 8つの観点

	観点	質問内容
①	保健室訪問発表会への評価	保健室発表会はどうでしたか？
②	ミニ運動会への評価	ミニ運動会はどうでしたか？
③	懇親交流会への評価	懇親交流会はどうでしたか？
④	FS全体への評価	FSに参加してどうでしたか？
⑤	友人・仲間との関係	友人や仲間との関係が深まった
⑥	先輩との交流	話したことのない人や先輩と話せた
⑦	教職員との交流	教職員とコミュニケーションをとれた
⑧	大学生活への動機づけ	大学生活に対して積極的に取り組めるきっかけとなりましたか？

次ページの図 1～図 8 を参照しながら、それぞれの回答からわかる事実を簡単に概観しよう。図 1～図 4 は FS のプログラムに関する学生の評価、満足度を示すものである。図 1.「保健室訪問発表会への評価」は、アンケート用紙では「保健室訪問発表会はどうでしたか？」と問うている。これを見ると、多くの年度で「良かった」が 80%を超えており（H27 年度のみ 80%未満）、高い評価を得ていることがわかる。

図 2.「ミニ運動会への評価」は、アンケートでは「ミニ運動会はどうでしたか？」と問うた設問である。こちらは、平成 27 年度を除き、「良かった」が 90%にのぼる年度が多く、学生のミニ運動会に関する満足度はきわめて高いことがうかがわれる。

図 3.「懇親交流会への評価」は、アンケートでは「懇親交流会はどうでしたか？」と問うた設問である。こちらにも、「良かった」がすべての年度で 80%を超えており、90%に達する年度も多かった。

図 4.「フレッシュマンセミナー全体への評価」は、「フレッシュマンセミナーに参加してどうでしたか？」と問うた設問である。これは FS への総合的な評価を聞いた質問だが、平成 27 年度を除き、いずれの年度も「良かった」が 90%を超え、100%に近い高い値を示している。このことから、学生の FS に関する満足度は非常に高いことが見て取れる。

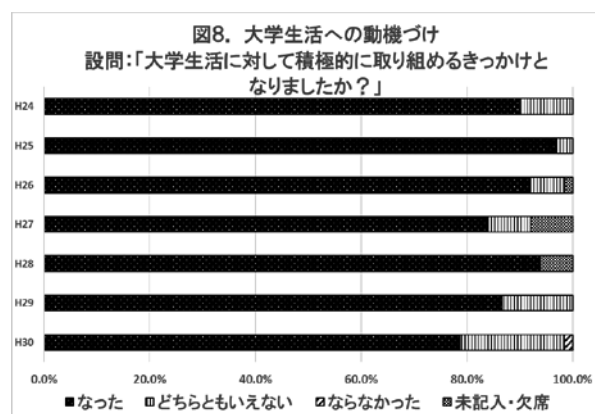
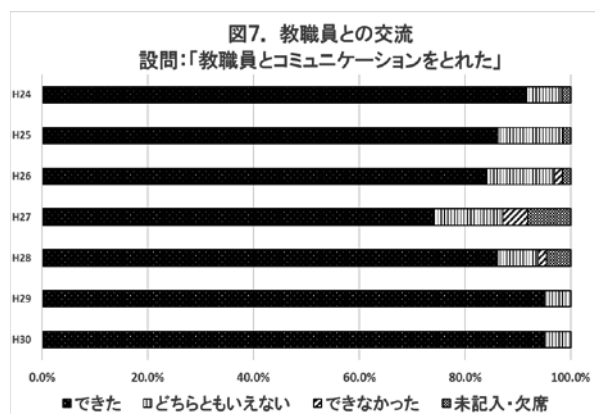
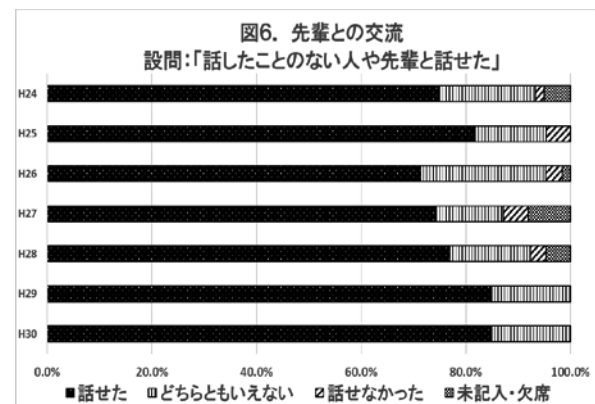
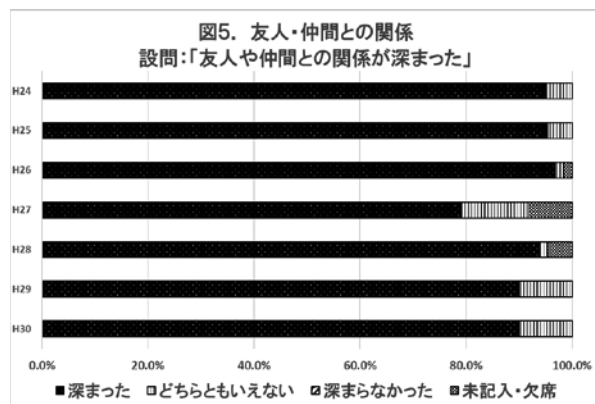
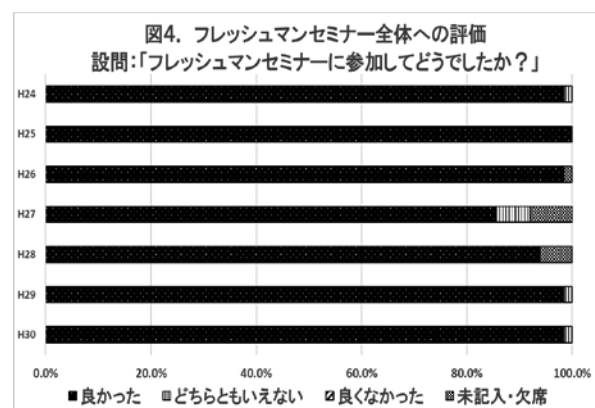
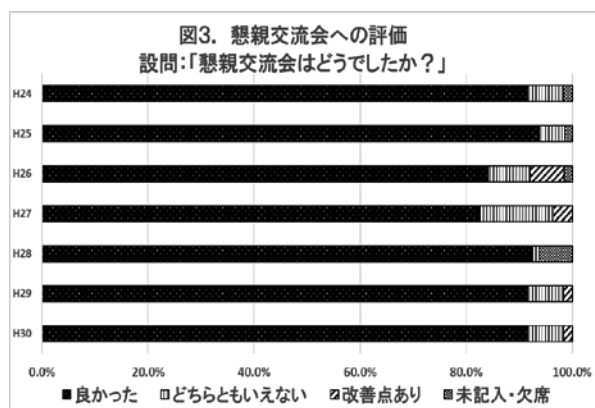
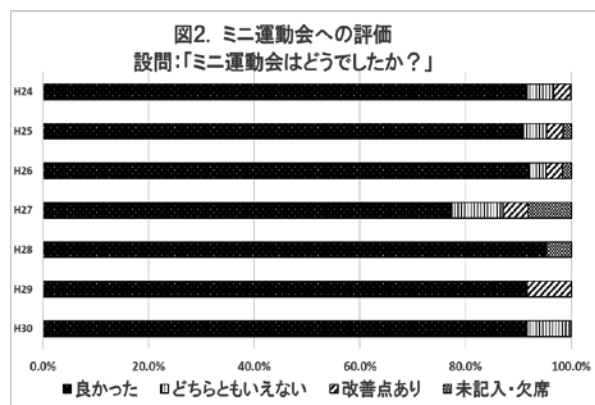
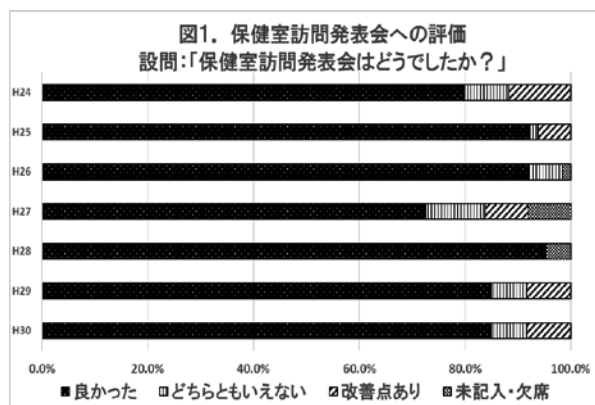
図 5～図 7 は、友人・先輩や教員との交流に関する質問である。図 5.「友人・仲間との関係」は、アンケートでは「友人や仲間との関係が深まった」という点を問うている。これも、平成 27 年度を除いて、いずれの年度も 90%の学生が「深まった」と回答している。

図 6.「先輩との交流」は、アンケートでは「話したことのない人や先輩と話せた」という点を問うている。これは、他の設問に比べるとやや評価が低く、「話せた」の割合は 80%前後の値を示している。「どちらともいえない」の割合も他の設問に比べると相対的に多い。先輩との交流についてはいささか難しさがあることがわかる。

図 7.「教職員との交流」は、アンケートでは「教職員とコミュニケーションをとれた」という点を問うている。これも、平成 27 年度を除いて、「できた」が 80%を超えており、年度によっては 90%を超えている。先ほどの先輩と教員とを比較すると、同じ交流という観点でも、相対的に教員とコミュニケーションがとれたという実感を学生は得ている。

最後に、図 8.「大学生活への動機づけ」は、アンケートでは「大学生活に対して積極的に取り組めるきっかけとなりましたか？」と問うた設問である。これは年度によって、ややばらつきがあるものの、平成 30 年度を除いて、いずれの年度も「なった」が 80%を超えている。この結果から、FS は学生にとって、大学での学びに対して積極的に取り組んでいくための重要なきっかけになっていることがわかる。

なお、平成 27 年度の回答がいくつかの設問で相対的に低い値を示していることがわかった。その理由は、FS 当日に欠席者・遅刻者が多く、プログラムに参加できない学生が複数名いたためと思われる。平成 27 年度の FS は、開催日前日から関東北部を中心に大雨が降り、河川の氾濫による洪水が生じた「平成 27 年 9 月関東・東北豪雨」と重なってしまった。開催日は、天候は回復したものの、交通機関の乱れが激しく、数時間かけて大学に到着する学生も少なくなかった。その影響がアンケート結果に表れていると思われる。



3.2 アンケートの自由記述から

次に、同じアンケートの自由記述欄を参照しよう⁽³⁾。ここでも、上記の8つの観点から主だった記述を任意にピックアップした。その上で書かれた内容ごとに次の4つのカテゴリーに分類した。つまり、①保健室訪問発表会への評価、②友人・先輩・教職員との交流、③企画運営の協力、④大学生活への動機付け、である。なお、以下のゴシック体による記述はアンケートから引用した本文である。また、カッコ内の(H24)等は実施年度を示す。

①保健室訪問発表会への評価

第1に保健室訪問発表会に関する記述を取り上げる。記述の内容にはいくつかの類型があった。1つは発表の技術に関する記述である。「時間配分、資料の提示の仕方、声の大きさやスピードなど代表になった人達から学ぶことができた。自分も上手になりたいと思った」(H24)といったものや、「プレゼンの方法、資料の工夫、話し方など人の発表を聞くことで自分に足りないものが何か知ることができた」(H25)といったものである。

2つは養護教諭の諸実践、保健室の多様性を学んだという記述である。「同じ保健室訪問でも着眼点がそれぞれに異なり大変勉強になった」(H24)、「色々な学校でのそれぞれの工夫を聞くことができてとても勉強になった」(H25)、「自分の理想の保健室像、養護教諭像をイメージすることができた」(H28)、「養護教諭が工夫していることや、現代の子供の健康について知ることができて、良い学びとなった」(H30)、「自分とは違う経験をしてきた人達や、考えをきくことができてとてもよい学びとなった」(H30)、といったものである。

3つは発表会自体が学修の動機付けとなったとする記述である。「仲間の発表を見て向上心がわいてきた」(H28)、「発表を聞いてモチベーションがあがった」(H29)、「発表だけでなく話し合いの時間があることで深く知れるものや気付かない視点が見えて良かった」(H29)、「子どもの実態を聞くことができて勉強にやる気が出た」(H29)、などである。また、学んだ点だけでなく、「保健室課題発表の際、発表者への質問が少なかった」(H24)、「個人的な改善点は、もう少し自分から意見を積極的に言えることができればよかった」(H30)など、反省点への言及も少なくなかった。

②友人・先輩・教職員との交流

第2に友人・先輩・教職員との交流に関する記述が多かった。特にミニ運動会や懇親会を通して交流が図られたことへの言及が多数見られる。1つには同じ学年の友人との関係が広がり・深まったことが書かれてある。「あまり話したことがない人と話すことができたり、新たな発見があったりといい機会でした」(H25)、「委員に入って友人関係の幅を広げられ、非常に良い経験ができた」(H29)、「懇親会や運動会ではたくさんの人と交流したり、体を動かすことができてよかった」(H30)、といったものである。

2つに先輩・教職員とのタテの関係を得たことの記述も多い。「懇親会の名刺交換では今まで話をする機会のなかった人と話せたり、先輩との交流ができた」(H24)、「縦と横のつながりが強まった。来年は先輩として積極的に参加したい」(H24)、「立食パーティーで先輩と仲良くなることができ、これから様々な相談ができそうで良かったです」(H25)「ミニ運動会や懇親会ではクラスの人とはもちろん、先生方、先輩方とお話しをする機会がた

くさんあり、様々な交流をすることができた」(H25)、などである。

③企画運営の協力

第3に仲間と協力して企画を準備・運営する経験に関する記述も多い。1つに 報連相(ほうれんそう)に関する言及がある。たとえば、「準備段階で連絡不足、確認ミスが発覚し大変だったが、それを教訓としその後は一人ひとりが必死に取り組む姿が見られた」(H24)、「報告・連絡・相談をしっかりとやるべきだと身に染みた」(H29)、などである。

2つに 協力して目的を成し遂げることの達成感への言及があった。たとえば、「運動会ではみんなで1つになって取り組むことができた」(H24)、「一人の力ではなく協力して1つのことを成功させる喜びを感じました」(H25)、「実行委員の仕事はとても大変だったのですが、それと同時に達成感も生まれ充実した期間を過ごすことができました」(H25)、「みんなと協力してひとつの事を成し遂げる達成感がとてもよかった」(H28)、「企画の大変さを知り、達成感を味わうことができた」(H29)、といった記述が見られた。

④大学生活への動機付け

第4にFSを通して大学生活への動機が高まったとする記述も少なくない。1つには 勉強・行事への意欲が向上した ことに関する記述があった。「実行委員を体験して勉強になった。今後もこのような行事には積極的に取り組んでいきたい」(H24)、「同級生が一生懸命取り組む姿をみて自分もがんばらないといけないなと刺激をもらった」(H30) などである。

2つに 人とのつながり、コミュニケーションに関する言及もある。「人とのつながりを大切にして、9月からも日々努力したいと思えた」(H28)、「コミュニケーションスキルを高めて人間関係の輪を広げることが大学生活を送る上で大切だと気付いた」(H29)、「コミュニケーションをとっていくことは養護教諭にとって大切だと思った」(H29) などである。

3つに 養護教諭を志望する意欲が高まった という記述も多い。「養護教諭になりたいという気持ちが一層強まった」(H28)、「養護教諭になる為の意識を高めることができてよかった」(H30) といったものである。また、本専攻への愛着も書かれてあった。「学びもあり楽しみもあり、改めて養護っていいなと思いました」(H25)、「こんなにも熱心で団結力のあるすばらしい先生方や先輩がいることに改めてうれしく思いました」(H30) などである。

4. 考察

アンケートの結果を概観すると、FSに対する高い評価・満足度と積極的・肯定的な記述が見られた。このことから、FSは学生に対して学修の動機付けとなる教育実践として有効に機能していると考えてよいだろう。ここではごく簡単にこの結果に考察を加えてみよう。

単純集計の結果から、第1に本稿の主題である「学修の動機付け」に注目しよう。すると、図8「大学生活への動機付け」で「大学生活に積極的に取り組めるきっかけになった」が高い値を示す年度は、相対的に平成25年度、26年度、28年度であった。なぜこの3つの年度は高い値となっているのだろうか。他にこの3つの年度が高い値を示している設問を探すと、図1「保健室訪問発表会への評価」も同様に、平成25、26、28年度が「良かつ

た」が高い値を示している。そうすると、推測の域を出ないが、「保健室訪問発表会」と「大学生活への動機付け」のあいだに何らかの相関関係があると考えられなくもない。つまり、保健室訪問発表会への評価が高いと、大学生活への動機付けも高まると考えられるのである。このことから、保健室訪問発表会において積極的で肯定的な取り組みを行うことができた学生は、その後の大学生活への動機付けも向上するということが示唆されている。

自由記述からも裏付けられるように、保健室訪問発表会では「発表の技術」や「保健室の多様性」、「学修の動機付け」に関する記述が多く見られた。他者との協働の学びを通して、大学生活への動機付けを得る重要なプログラムとなっていることがわかるのである。

第2に友人との人間関係の形成や先輩・教職員との交流を深めるプログラムは、ミニ運動会や懇親交流会であることがわかった。新入生にとって大学コミュニティへの安定的な参入は重要な課題であり、こうした交流プログラムが果たす役割は大きい。自由記述からも、学生は先輩、教職員との人間関係の形成を望んでいることが明確にわかった。

5. 今後の課題

最後に、FSの今後の課題について、①実施上の課題と②研究上の課題に分けて考えよう。第1に実施上の課題としては、実行委員会メンバー以外の者にどのように経験を共有させるかという点が挙げられる。アンケートの自由記述を見ると、実行委員であった学生がより深く主体的に学修の動機付けを得ている傾向があった。4月から9月まで長い期間にわたって実行委員同士が協働で準備にあたるので、それだけ学修の動機付けを得るチャンスは増える。実行委員以外の学生も参画できる機会を検討する余地もあるだろう。

また、平成27年度の学生の示す値が他の年度の学生と比べて顕著に低かった。それは天候不順により多数の欠席者・遅刻者が出たためであったが、その影響がアンケート結果にも表れていた。FSが学修の動機付けの経験となっていることを考えると、可能な限り全員の参加を得ることが大事だろう。そうすると、天候不順・交通遅延が生じた場合のために、開催の延期とその予備日の確保といったことも検討されてよいだろう。

第2に研究上の課題としては、本稿は研究といえるものではなく過去のFSの実績を報告しただけのものだ。そのため、アンケートの質問項目をもう少し詳細に設計して、学生の意識・態度を把握することも意義があるだろう。実践と研究は車の両輪であり、ふたつを有機的に結び付けることで、今後もよりよい初年次教育プログラムを実践していきたい。

注

(1) 中教審のいう学力の三要素とは、①「知識・技能」、②「思考力・判断力・表現力等の能力」、③「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」である。

(2) アンケートの他の設問は、FSの開催時期、開催場所、時間配分、食事内容等に関する質問であるため、本稿では取り上げていない。

(3) 平成26年度の自由記述の結果が残っておらず、参照できていないことを断っておく。

参考文献

香川栄養学園 80 周年記念事業編 2013『養護教諭課程創設 30 周年記念誌』。

中央教育審議会 2014「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大

学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」文部科学省。

杉谷祐美子 2018「初年次教育研究の動向と課題」初年次教育学会編『進化する初年次教育』
世界思想社：8-19。